

## →津村記久子の大阪、大正区を歩く

2021.7.11（日）カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第568回 参加報告

### ■南下して小林公園・大正中央中学校を巡り、南恩加島天満宮に至る

「大正通り」を南に下り、東に折れると小林公園の北角に出る。公園で一呼吸して少し南に歩き、西に戻ると大正中央中学に行き着く。今回のテキスト『エヴリシング・フロウズ』の著者・津村記久子が、主人公ヒロシ達三年生が通うと想定したであろう中学校だ。

この小説は、この大正の街を舞台に彼らの日常が綴られているのだが、校舎をのぞき込むと、実際にヒロシがその辺りで、あるときは男仲間と、またあるときは女子生徒と笑ったり、うつむいたりしているのではないか、そう錯覚するのである。

### ■商店街を通り抜ける

最後の目的地・南恩加島天満宮に向かう途中、アーケードのある商店街を通り会わせた。この商店街も御多分に洩れず、殆どがシャッター街である。

店を開けている「漬物店」を覗くと、奥で座っていた店主が、我々の列に驚いてか「今日は何事！」という顔をしている。

今日のレジュメを見せると「60年前にのれん分けしてもらい福島から来た頃は盛況で、50年ばかり前まではお客さんはいた。スーパーが出来て、さっぱり……」「大店法という法律が出来てからはどこの商店街も……。「昔は商店街と公設市場は隣り合わせで、共存共栄してましたよね」「あんたら、えらいさんで何とかしてくれまへん？」「……」「いや、余計なこといいました！」

大正年間から工場で働く労働者が大勢住み始めた。特に沖縄からの移住者が多く、沖縄県人会の人々でこの辺りはきっと賑わっていたのであろうと想像するが、その縁（よすが）は「沖縄料理」のカンバンで偲ぶのみである。

### ■通称「めがね橋」を渡る

解散後、天満宮の社のある公園から「大運橋通り」に出ると「めがね橋」（千本松大橋）を200mほど先に見上げることが出来た。本会は、この辺りから「めがね橋」を見るだけで、近くのバス停から帰路に着いたが、ここまで来て、テキストの小説でも登場するこの橋を渡らないのはもったいない。らせん状の坂はそれほど急ではなかった。僕は両翼の「めがね」を2周ずつして風景を眺めた。眼下は想像した通り「眺め甲斐のある景色」であった。

西成区に入りバスで芦原橋駅前に戻ると、駅近くに小さな「たこ焼き屋」があった。たこ焼き5個をアテに缶ビールを2缶。今日も全く歩いたことのないところを歩かせて頂いた。大感謝である。

（報告 2021/7/16・石元英雄）